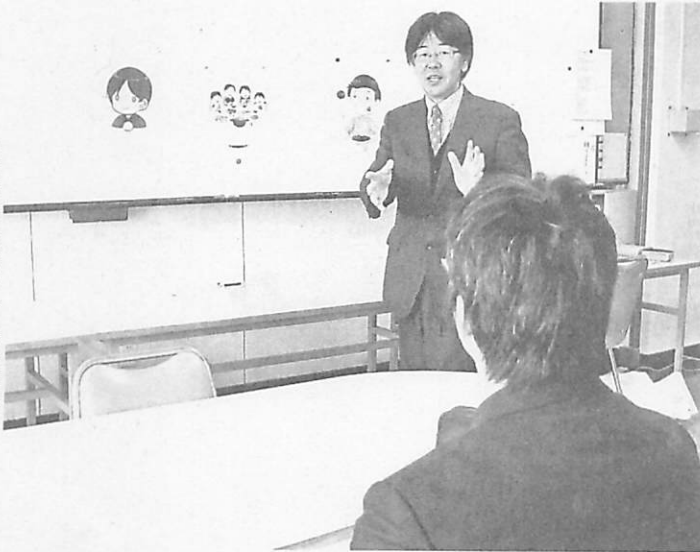


教育の窓

kyoiku no mado

高校で通級指導 社会性育成

男子生徒と対人関係のトレーニングをする副島教諭―大阪市東淀川区の府立柴島高で



発達障害などの生徒が通常学級に在籍しながら特性に応じて別室で一部の授業を受ける「通級指導」が、4月の新年度から公立高校でも始まる。導入から20年以上がたつ小中学校では指導を受ける児童・生徒が年々増え、高校でもその必要性が指摘されていた。ただ、指導方法はまだ手探りで、専門性の高い教員の確保も課題だ。【岡崎英恵、写真も】

試験導入 大阪府立柴島高

●生徒と1対1で

「大学入学後、すぐに宿泊付きのセミナーがあったとしよう。『食事は班ごと』と指示されている。君は時間通りに席に着いて待つが、他のメンバーは遅れてきた。さあ、何て声をかける」

3月上旬、大阪府立柴島高(大阪市東淀川区)の通級指導教室を訪ねると、担当する副島勇夫教諭(56)が2年生の男子生徒(17)と向き合っていた。生徒が「『ルールは守ってくださいよ』かな」と答えると、副島教諭は「出会って

数日人間関係もできていない段階だよ。もう少し柔らかい言い方はないかな」と瞬間を重ねた。

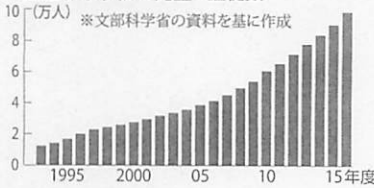
総合学科の柴島高校は文部科学省が全国で指定した通級指導の研究指定校36校の一つで、昨年10月から試行的に導入した。この生徒は週4時間、選択科目の時間に通級指導教室に通い、社会で生活していく上で必要な対人関係などを学んでいる。副島教諭と、特別支援学校での指導経験のある建林敬子教諭(53)が、交互に1対1で指導する。現在はこの生徒一人だけだが、春からは新2年生も加わるという。

●二一ズ増え続け

通級指導の対象となる児童・生徒は、発達障害や言語障害、情緒障害などさまざま。小中学校では1993年度に導入された。文科省によると、初年度は1万7059人が指導を受け

通級指導を受けている公立小中学校の児童・生徒数

※文部科学省の資料を基に作成



たが、2016年度には約8倍の9万8311人に増え、全小中学生の約1割に相当する。児童・生徒や保護者の間で、障害への理解が進んでいることが背景にあると考えられる。

●修了で単位認定

これまでは義務教育の修了後、障害のある生徒の学びの場は、一部の例外を除き高校の通常学級か特別支援学校に限られていた。文科省が11年度、全国の小中学生約5万2000人を対象に実施した実態調査によると、発達障害などの可能性がある児童・生徒は6.5%。08年度の中学3年生約1万7000人を対象にした調査では、発達障害を抱えると思われる生徒の割合は2.9%で、うち75.7%が高校に進学していた。高校

進学率が98%を超える中、文科省の専門家会議が16年3月に高校でも導入すべきだと報告し、18年度からの制度化が決まった。

高校での通級指導で重点を置くのが、生徒の自己理解と対人関係や社会性を育むトレーニングだ。生徒の特性に合わせて個別に作った学習計画を基に修了した場合、単位認定される。小中学校での通級指導と異なる大きな特徴だ。

柴島高の生徒は注意欠陥多動性障害(ADHD)と診断され、状況に応じたコミュニケーションが苦手で自己肯定感が低かった。長所・短所な

専門知識持つ、教員育成不可欠

ただ、高校の通級指導は一気に広がるわけではない。文科省特別支援教育課は「障害のある生徒の自立と社会参加のために導入を決めた」と意図を強調するが、現状ではきめ細かな指導ができる専門的な知識を持った教員が少ない。文科省によると、通級指導の導入に伴い加配を予定する高校教員は全国で113人。18年度には43都道府県で通級指導が導入されるが、数校ずつにとどまる計算で、大阪府内でも柴島高と別の1校だけだ。

さらに高校は小中学校と異なり、進学や就職も視野に入れた指導が必要になる。新しい制度のため手法は定まっておらず、単位認定するための評価基準をどうするかという課題もある。柴島高校の連林教諭は「同じように試行している高校を視察し、良い部分を取り入れるなど手探り状態。社会に出る前の生徒が困らないような工夫をしていきたい」と話す。新潟大教職大学院の長澤正樹教授(特別支援教育)は「中

学まで通級指導を受けていた注文する。